様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０３７６

研究課題名（和文）１６世紀後半～１７世紀のイタリアの詩論における「模倣」と「想像」の関係について

研究課題名（英文）A study on the relation between imitation and imagination in Italian poetics between the second half of the 16th and 17th centuries

研究代表者
村瀬　有司（MURASE, YUJI）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：１０３２４８７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,400,000円、（間接経費）　420,000円

研究成果の概要（和文）：　16世紀後半のイタリアで多数刊行された詩の創作理論において、「模倣」の理念は極めて重要な役割を果たしている。この「模倣」は対象からその忠実な似姿を再現する方法であり、詩人個人の恣意的な想像力とは相いれない特徴を含んでいる。本研究は16世紀後半から17世紀のイタリアにおいて「模倣」と「想像」の関係が詩人・文人によってどのように捉えられ理論化されてたのかを、代表的な論考をもとに検証した。そして、①「模倣」を重視し模倣を損なわない形で「想像」を取り込もうとする立場、②「模倣」を認めつつそれとは別個に「想像」を重視する立場、③「模倣」に否定的な立場の3つの傾向を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：　In 16th century Italian poetics, the concept of "imitation" played an important role. This "imitation"-the method of reproducing from an object its faithful image- had aspects opposed to the poet's personal imagination. This study tried to investigate what 16th- and 17th- century Italian poets thought of the relation between "imitation" and "imagination", by analyzing important poetics between the second half of the 16th and first half of the 17th centuries. Three tendencies were found: (1) "imagination" was perceived as being complementary to "imitation"; (2) "imitation" was respected but "imagination" was considered important regardless of the former; (3) "imitation" was perceived negatively.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：模倣　想像　16世紀イタリア　Torquato Tasso　像　詩論

１．研究開始当初の背景

(1)　本研究の背景として、16 世紀のイタリアにおいて詩の創作技法に関する活発な議論が行われたという事実がまずあげられる。これらの創作理論においては、対象からその忠実な似姿を再現する「模倣」の方法論が大きな位置を占めている。この模倣においては、対象を恣意的に描きだしたり、ありもしないことを空想によって描き出したりすることは忌避される。このような「模倣」の創作理念を重視した詩人にとって、それと対極に位置する想像力はどのような意味をもっていたのか、この疑問が本研究課題の出発点である。

(2)　報告者が長年にわたって研究してきた 16 世紀後半のイタリアを代表する詩人トルクァート・タッソは、「模倣」と「想像」の問題を考える上で多くの示唆を与えてくれる。タッソは英雄詩の創作技法を生涯にわたって探究し、模倣に立脚した自らの創作理論のなかで、ありえない超自然の驚異をどのように作品に取り込むかという問題を繰り返し考察している。超自然の驚異に象徴される物語の虚構の要素、あるいはそれを生み出す詩人の想像力を、タッソ自身はどのように考え自らの創作理論に位置づけたのか。この具体的な疑問が本研究課題の背景となっている。

２．研究の目的

16 世紀後半から 17 世紀初めにかけてのイタリアにおける詩の創作理論を対象に、当時の詩人・文人が「模倣」と「想像」の関係をどのように捉え、創作理論のなかで両者をどのように理論化していたのかを明らかにすることが本研究の主要な目的である。

２．研究の方法

(1)「模倣」と「想像」の関係を検証するにあたっては、可能なかぎり実証的・具体的に問題を探求するべく、重要と思われるキーワードを選択してそれに基づいて研究を進める方針をとった。具体的には、「模倣」において重要となる「像」という言葉、また「想像」に直結する超自然の「驚異」という用語、「想像」をネガティブに捉えた「嘘・虚偽」「ソフィスト」などの単語に留意しながらテキストの分析を進める方法をとった。

(2)　分析対象としては、16 世紀後半のイタリアにおいて「模倣」に基づくもっとも体系的な創作理論を書き残したタッソを中心に、彼が批判したマッツォーニ、パトリツィらの論考を考察した。これは、個々ばらばらのテキストではなく互いに関連があるテキストを検証することで効率よく問題点を整理するためである。さらに 17 世紀の創作理論・言語観を考察する手がかりとしてエマヌェーレ・テザウロの論考を選択した。テザウロは 17 世紀を代表する修辞学者･詩人であり、その著作を検証することによって、言語・修辞における想像の位置づけがどのように推移したのか（あるいはしなかったのか）を検証することが可能となる。

４．研究成果

(1) 研究の第一段階として、トルクァート・タッソ（1544-95）が後期の創作理論において、「模倣」と「想像」をどのように位置づけたかを検証した。晩年の論考『エルサレム征服の考察』において、タッソは、英雄詩を構成する主要な要素として歴史とアレゴリーを重視するようになる。そして、英雄詩が史実から離れるところ、つまり虚構を導入している箇所で、宗教的な意味というアレゴリーを導入するべきだと考えるようになる。宗教的な意義をアレゴリーによって表現するということは、感覚でとらえられない神のような対象を、感覚でとらえうる現実の対象に置きなおしたうえで表現することを意味している。タッソはこのアレゴリーによって意味のないものに意味を与え、嘘を真実に転換することができると考える。そして、最終的には、この宗教的アレゴリーをイデアと同一のものとみなすに至る。

タッソによるこのようなアレゴリーの導入は、模倣の理念に非常に好都合なものである。模倣は、対象からその忠実な像を引き出すプロセスだが、このプロセスは、プラトン以来、真の実在であるイデアからみれば影のようなもの過ぎない現実からさらにその像を生み出しているに過ぎないという批判を浴びてきた。タッソは後期の詩論で、宗教的アレゴリーをイデアとみなし、そのイデアに基づいて、史実から逸れた英雄詩の虚構を弁明しようとしたのだが、これは、「事物→像」という模倣のプロセスを、「イデア→事物→像」にまで拡張したことを意味している。このように、虚構という空虚な「像」に、存在の基盤としての宗教的意義を与えることによって、フィクションを模倣のプロセスに取り込むこと、これがタッソの後期の詩論にみられる基本的な方向性であることを確認した。

(2) さて、タッソは後期の理論書『英雄詩論』においてヤコポ・マッツォーニを批判している。タッソが批判したのは、正真正銘の詩人は空想的な模倣をおこなう者であり、詩はソフィストの技術に属する、というマッツォーニの見解である。本研究は、タッソに続いて、彼が批判的にとらえたこのマッツォーニの立場を検証した。

マッツォーニ（1548-98）は、『ダンテ擁護論』において、詩と詩人に関する独自の議論

を展開している。マッツォーニは議論の大前提として、詩が模倣であることをまず確認する。次いで彼は、詩を劇のジャンルと叙述のそれの2つのカテゴリーに大別し、そのそれぞれに「空想的な模倣」と、「ありのままの模倣」という区分を設定する。詩を模倣ととらえている点で、マッツォーニの見解は同時代の他の多くの文人・詩人と同じである。しかし、当時の創作理論において「模倣」とセットで言及される「本当らしさ il verisimile」については、これを否定的に捉えている。その代わりとしてマッツォーニが導入したのが「信じうること il credibile」という用語である。この概念は、「本当らしさ」よりもいっそう主観的であり、「説得」と緊密に結びついているという点でいっそう修辞的な性質を帯びていると言える。

マッツォーニは、「嘘」・「可能なこと」・「信じうること」の三つの選択肢のなかで、「信じうること」こそが詩の主題としてもっとも本質的なものだと言明する。そして、詩人は「信じうること」を中心に詩作を行うので、これにかなったやり方、つまり感覚に訴える方法を使わなければいけないと主張する。同時に、詩の主題として「信じうること」を、「本当のこと」や「偽りのこと」よりも、また「ありえること」や「ありえないこと」よりもいっそう重視しなければいけないと強調する。さらに詩が真実そのものよりも「信じうること」を重視する以上、それは古代においてソフィスト的と呼ばれていた理知的な能力のもとに置かれるべきだと主張する。

このソフィストという用語は、タッソがマッツォーニを批判する一因となったものだが、マッツォーニは、この単語を悪い意味で使ってはいない。彼は、ソフィストの技法の特徴を2つに大別する。一つは、全てのことを修辞的につまり説得的に扱うという特色であり、もう一つは、虚構のテーマを取り上げてそのテーマを模倣によって、似姿を再現しながら展開するという特色である。修辞としてのソフィストの技法と像の作り手としてのソフィストの技法、この双方において詩人がソフィストに類似するとマッツォーニは考える。さらに彼は、ソフィストを、良いそれと悪いそれとに区分する。そして、良いソフィストは、たとえ架空の虚像を知性に信じ込ませるにせよ、人間の意志を乱すことはなく、むしろそれを正しい状態に調整する者だと考える。

ソフィストという言葉の意味をプラスに変えようとするマッツォーニの意図は、古来この言葉が詩人を批判するためにガティブな意味で使用されてきた事実に由来する。詩人はソフィストだという批判の図式を崩すこと、同時に虚構を生み出す権利を詩人に確保すること、これがマッツォーニの意図だと考えられる。同様に、16世紀の創作理論において模倣を重視する立場から批判的に使用されることが多い「偶像」という言葉についても、マッツォーニはこれを「似姿」や「像」といったニュートラルな意味に再定義することで、この言葉のネガティブなニュアンスを払しょくしようと試みている。この再定義の試みも「詩人は偶像の作り手だ」という批判に対処したものだと言えるだろう。このように、詩人を批判する用語を再検証したうえで、マッツォーニは、詩人の役割とは「本当らしい嘘」ではなく「信じうる驚異」を生み出すことだと主張するのである。

(3) マッツォーニは確かに詩作における空想の働きを重視していたが、彼の創作理論の根底には、やはり「模倣」の理念があった。そうであればこそ、「空想的な模倣」といういささか不自然な言い方がなされていたのである。このマッツォーニの姿勢は、16世紀の創作理論においていかに「模倣」が深く根をおろしていたかを示すものである。しかし、「模倣」そのものを否定する見地から、詩人の「想像」を支持した文人も存在する。それがフランチェスコ・パトリツイである。

パトリツィ（1529－1597）は、タッソが英雄詩の創作技法を巡って論争を展開した相手の一人である。この論争は、パトリツィがアリオストの騎士物語を弁護する一環としてアリストテレスの詩論とホメロスの叙事詩を批判したのに対して、タッソが反論をし、そのタッソの言い分に対してさらにパトリツィが再反論を加えた一連の応酬である。このなかで、パトリツィは詩が模倣であるというアリストテレス（及びタッソ）の見解を真っ向から否定する。この模倣そのものを否定する立場はパトリツィの創作理論に一貫したものであり、彼は、もし詩が模倣を基盤にしているとするならば、客観的な現実を模倣していない作品はすべて詩ではないことになってしまうと述べ、模倣は詩の本質ではないと明言する。さらに「模倣」だけでなくアリストテレスの詩学全般を、演劇とホメロスの叙事詩のみに立脚した、十分な基準点になりえないものと断じている。

パトリツィも、タッソやマッツォーニと同様、詩には「驚異」が必要であると主張している。その驚異は、信じがたいと同時に信じえるものでなければならいが、この驚異を描き出すにあたって詩人はもはや「模倣」という理念に拘束されることはなく、「想像する者」「作る者」「変形する者」として、新しい形を想像し形成しあるいは作り直すことにが認められる。

この詩人の創作活動の原動力としてパトリツィが重視するのが、新プラトン主義の流れをくむ「激情 furore」である。パトリツィによれば、この「激情」はギリシア人が「神的熱狂」と規定したところのものに相当しており、神的な性質をおびた創造の力として、宇宙の秩序と星々の感応力に依拠するものとされる。この「激情」を導入することによってパトリツィは、詩人を宗教的な預言者に、

また詩作品を、原初の知を伝える一種の聖典として位置付けることになる。このような詩人あるいは詩作品の捉え方は、後期のタッソの創作理論に非常に近い。実際、パトリツィの創作理論が後期のタッソに影響を及ぼした可能性が批評家によって指摘されている。

パトリツィの創作理論は、アリストテレスの模倣の理論を全面的に否定している点で非常に斬新である。しかし同時に、詩と詩人の役割を神学的な意味に捉えようとしている点で、伝統的な枠組みのなかにあるものだと言える。

(4) 晩年のタッソは、インプレーザに関する対話篇を書き残している。一方、17 世紀を代表する文人・修辞学者のエマヌエーレ・テザウロ（1592-1675）も『完璧なインプレーザのイデア』という作品（1622-29 年頃にかけて執筆）を書き残している。インプレーザとは、ある対象（の特徴）を別の事物によって象徴的に表現したものであり、通常は象徴的な図案とそれに関する短いモットーからなる。このインプレーザの図案は一種の視覚的なメタファーであるが、その象徴的な図案が対象の「像」として表現されている点で、つまり事物と像という関係が内包されている点で、模倣の問題を検証するうえでも有効である。このインプレーザをめぐる議論を検証することによって、タッソとテザウロの模倣と想像をめぐる見解の類似点・相違点を明らかにすることが可能になる。

インプレーザに関するテザウロの論考においてまず注目すべきことは、タッソのそれとの類似性である。インプレーザは、しばしば、特定の人物Ａの一つの特性を取り上げて、その特性を端的に示す象徴的な図案Ｂを作り出す。ＡとＢは、一部の共通項・類似性を媒介として、Ａ＝Ｂという両者の全体に関わるメタファーの等号関係を築くことになるのだが、このＡ＝Ｂという対象－シンボルの関係は、事物－像の調和の問題と関わり合っている。たとえば、テザウロは、王の姿をヤマアラシによって表現した図案に関して、針を突き出したヤマアラシは、確かに剣をふるう好戦的な王の姿を的確にとらえたものだが、同時にヤマアラシは豚に類する下等な動物なのでこれによって王を表現することは適切ではないと述べている。部分的な特色が合致していても、全体の特色が調和していなければ、そのシンボルは適切とは言い難い。このテザウロの見解は、対象から忠実な像を引き出す模倣のテーマと重なり合っている。実際、模倣を重視したタッソも、インプレーザの対話篇のなかで「似ている類似 simil similitudine」によって対象を表さなければいけないと明言している。インプレーザの図像が「像」とみなされている以上、その像は全体として元の対象に類似していなければならないのである。

象徴的な図案として怪物のような空想的な存在を利用すべきではないとするテザウロの見解も、正統的な模倣の立場に沿ったものである。テザウロは、空想的な図案を、対象の重々しさ、説得力、明晰性を損なうものとして批判する。偽りのシンボルが対象を表現する場合には、そのシンボルは元の対象の存在の重さを減じることになるし、存在しえない事象がメタファーとして使用されれば、そのシンボルが共通項として示す対象の性質も、信頼と説得力を失うことになる。シンボルに対するこのような注意は、人工物（空想的な怪物を含む）ではなく自然の存在をインプレーザの図案として使用すべきだと主張するタッソのインプレーザ論にも、また事物‐概念‐言葉の照応関係を重視する彼の言語観にも、共通して認められる。

一方で、二人のインプレーザ論には、相違点も見受けられる。その一つが、「驚き」に関する違いである。タッソの場合、インプレーザは、基本的に「似ている類似」によって作り出されるものである。したがって、驚きは、対象とイメージの間の予想外の結びつきから生じるというよりは、むしろ自然物であるイメージそのもののなかに見出されることになる。タッソがインプレーザのシンボルとして自然の存在を称揚したのは、一つには、自然が神によって作り出されたものであり、そこには必ず驚くべきものが秘められており、この自然のシンボルそのものによって驚きを生み出すことができると考えたためである。これに対してテザウロはシンボルそのものの珍奇さもさることながら、まったく異なる類に属する二つのものの間に類似性を見出すことを積極的に評価する。17 世紀のこの文人は、かけ離れたものを結び合わせる予想外の類似性こそが、観る者を喜ばせ、その心をとらえ引きこむことができると評価する。

テザウロは『アリストテレスの望遠鏡』（1654 年刊行）において隠喩のテーマを詳細に論じ、そのなかで類似性が簡単には分からないようなメタファーこそがいっそう高い価値をもつと述べている。この内奥に隠れている密かな類似性を見出すことが、テザウロのメタファーの一つの重要なテーマとなる。そして、かけ離れた性質のなかに結びつきの痕跡を読み取る力として、才気と鋭敏さが高く評価されることになる。二つの対象がかけ離れたものである場合、両者の類似性を把握するには一瞬で多くの階段を駆け上がることが必要になるが、才気と鋭敏さは、それを可能にする原動力とみなされる。タッソの場合、かけ離れた二つのものの間に密かなつながりを見いだすこのような能力は、「似ていない類似 dissimile similitudine」に割り振られているように見受けられる。タッソは象徴的図案を「似ている類似」と「似ていない類似」の二つに大別し、前者を世俗の事柄を扱うものとしてインプレーザに割り振る一方で、後者を神聖な事柄の表現に特有のもの

とみなし、これをインプレーザの議論から除外している。この一見したところ似ても似つかない対象の間に類似性を見いだす能力、人間の感覚では捉ええない神的な存在を表現するための特殊な能力は、テザウロのいう、密かなメタファーを見いだすところの才気・鋭敏さと重なり合う部分を含んでいる。その意味で、ともにアリストテレスの理論に親炙した二人の詩人の間には相違よりも類似がより多く見出されると言える。

(5) 以上のような考察から、タッソを中心に、16 世紀後半から 17 世紀の初めにかけてのイタリアの詩論における、「模倣」と「想像」の関係について、一定の知見をえることができた。両者の関係については、大きくみて 3 つのタイプを指摘することができる。一つは、アリストテレスの模倣を何よりも重視し、驚異を生み出す想像力については模倣を損なわない範囲でこれを取り込むというタッソに代表される立場。いま一つは、模倣を詩作の重要理念として認めるが、それとは別に想像力の必要性を独立した形で創作理論に位置づけようとする立場（マッツォーニ、グアリーニら）。そして、非常に珍しいケースではあるが、アリストテレスの詩論そのものを否定するパトリツィの立場である。またテザウロのインプレーザとメタファーに関する議論は、タッソのそれと共通する特徴を含んでおり、最初のタイプの延長線上に位置づけることができるものと思われる。
　以上のような点を明らかにした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）
村瀬有司、「『エルサレム解放』第 19 歌の狼の比喩に関する一考察」、『大阪大学世界言語研究センター論集』第 7 号、2012 年 3 月刊行、査読有り。

〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者　　村瀬　有司
（MURASE　Yuji）

研究者番号：１０３２４８７３

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：